



駐日ドミニカ共和国特命全権大使

エクトル・パウリーノ・ドミンゲス・ロドリゲス夫妻

ドミニカ共和国と日本を結び、 両国の絆を深める役割を果たしたい

カリブ海に浮かぶイスパニョーラ島の美しい国、ドミニカ共和国。

その駐日特命全権大使を5年前から務めるエクトル・ドミンゲスさんとアンドレア夫人に、
日本との縁も深いドミニカ共和国の魅力について伺った。

取材文 前原政之 撮影 雨宮薫

世界の

Ambassadors
from around
the World

大使たち

Dominican Republic

Mr. Héctor Paulino Domínguez Rodríguez & Mrs. Andrea Alexandra Álvarez Caminero



白い砂浜と青い空の下、美しい
コバルトブルーの海が広がる——
ドミニカ共和国を象徴する風景だ
©アフロ



「働き者」の女性たちが、
社会の大きな役割を担う

カリブ海域の北側に位置する大
アンティル諸島の中で、キューバ
島に次いで2番目に大きいのがイ
スパニョーラ島だ。ドミニカ共和
国は、その東側3分の2を占める
亜熱帯の国。日本の九州と高知県
を合わせたくらいに国土面積に、
約1065万人が暮らしている。

日本からドミニカ共和国への移
民は、数十年の歴史をもつ。野球
が人気であるなど、日本との共通
項も少なくない。また、美しいビ
ーチや山が多く、観光業も盛んだ。

大使「ドミニカ共和国に来ると、
まるで我が家に戻ったような気が
する」とおっしゃる観光客も多い
です。とても親しみを込めたおも
てなしを我が国の人びとはするの
です。そもそも、ドミニカ人の気
質として、人と人との距離がとて
も近い面があります。たとえば、
隣近所で料理の差し入れをし合う
ことも、日常茶飯事です」
夫人「空港に到着した外国のお客
様は、音楽やダンスで盛大にお迎
えします。ドミニカ人はダンスが

おすすめの見光スポットも、た
くさんありますよ。紺碧の海が美
しいビーチが多いですし、アメリ
カ大陸で最も古い教会（アメリカ
首座大司教座聖堂）など、歴史的
建造物もたくさんあります」
そうしたなか、ドミニカ共和国
の女性たちは、どのように暮らし



今も恋人同士のように仲むつまじい、大使ご夫妻。夫人のこの日の
ドレスは、ドミニカ共和国の三色旗（赤・青・白）をモチーフにしたもの

ているのだろうか？
夫人「ドミニカ共和国は、男女の
平等な社会参画が進んでいる国で、
多くの女性たちが男性たちと同じ
職業に就いて働きます。そして、
日本の女性たちがそうであるよう
に、ドミニカ共和国の女性たちは

研究機関の統計によれば、ドミニカ共和国では女性が家計を支えている家庭も多いのです。教育の現場には、小学校から大学に至るまで女性が多く、特に小学校では、全教員のじつに70%以上が女性です。女性が教育を担っている国なのです。

政治の世界においても女性の進出は目覚ましく、現在の政権では副大統領職や下院議長にも女性が就いており、全国の知事や市長にも女性が数多くいます」

大使「ドミニカ共和国には女性大統領が誕生する日も近いのではないのでしょうか」

大使就任にあたっての 覚悟と、夫人の奮闘

ドミンゲス大使の経歴は多彩だ。テレコミュニケーション（電信・電話などの遠距離通信）の会社で幹部を務めていた時期もあれば、主要テレビ局 DIGITALIS で「オイ・ホル・ラ・マニャーナ（本日の朝）」という番組の総合同司会兼ディレクターを務めたことも。非政府組織で社会貢献活動に従事していたこともある。行政や国際



ドミニカ共和国の北東部のサマナ半島にあるエル・リモン滝。世界的名瀑のひとつ ©eStock Photo/アフロ

関係の仕事も、長く続けていた。

大使「そうした仕事とは別に、私は社会に出てから、キューバのバナ大学で国際ビジネス調停学の学位を取るなど、外交や国際関係をめぐる専門的な勉強をずっと続けてきました。今私がこのような要職に就けたのも、長い下積みの中で、地道に努力を重ねてきた結果だと思っています」

アンドレア夫人が、言葉を継ぐ。

夫人「正直に言えば、夫の大使就任には戸惑いました。というのも、私は弁護士事務所を経営していて、弁護士としてずっと働いてきたからです。夫と共に日本に行くとなると、仕事をどうしようかと、そのことで悩みました」

大使就任は、ドミンゲス大使にとってはもちろん、夫人にとって

も、大きな決断の末のことだったのだ。

大使「私が大使でいる間、妻の仕



日本とドミニカ共和国を結ぶ仕事
がしたい」と語る息子のエドウィンさん



家庭ではよき妻・よき母である大使夫人。料理も得意だという

事は休業してもよいのではないかととも考えました。でも、妻には『どうしても続けたい』という強い思いがあったのです」

夫人「幸い、今はテクノロジーが非常に発達していますから、インターネットを介したテレビ会議などを駆使すれば、日本からでもドミニカ共和国の事務所の仕事に対応できるのです。」

とはいえ、そうしたやり方に慣れるまでは大変でした。日本とドミニカ共和国には13時間の時差がありますから、テレビ会議などが深夜になることも多く、睡眠時間を削って対応しました。今ではようやく慣れ、対応できるようになりましたが、赴任前は『両立できるだろうか?』と不安でした。でも、振り返ってみると、困難に思えることでも『やればできるものだな』と感じています。女性は環

思うので、その強みが発揮できた気がしています」

アンドレア夫人ご自身が、「働き者のドミニカ女性」の典型なのである。

創価大学で学ぶ子息に 受け継がれた父母の思い

大使赴任から、もうすぐ丸5年。その間に、娘のラウラ・パトリシアさんは日本で高校を卒業し、アメリカの大学に進んだ。息子のエドウィン・アレクサンデルさんは逆に、アメリカの大学を卒業してから日本の創価大学大学院に進み、経済学と国際ビジネスを学んでいる。

インタビューにも同席したエドウィンさんに、ご両親から学んだことについて尋ねてみた。エドウィン「両親は、言葉ではなく、行動で手本を示してくれまし



球大国のドミニカ共和国は日本のスポーツ交流も活発、と大使

首都サントドミンゴ旧市街の中心にある「コロンブス公園」。新大陸を指すコロンブスの像が立つ
 ©富井義夫 / アフロ



た。両親の背中を見て学んだことが、今の私を形成していると感じています。特に、『自分がやりた
 いことには、根気強く取り組むべきだ』ということ、また、『目先の
 ことだけを考えるのではなく、人生全体を見据える人生観』を教
 えられました」

大使夫妻は、「それらは皆、私たちが両親から受け継いだもので
 す」と言葉をそろえ、両親の思い出を語ってくれた。

夫人「私が育った家庭は貧しかったけれど、幸せに満ちていました。そして年一回、必ずささやかな家族旅行に連れていってくれました。半日ほどビーチで過ごすだけなのですが、美しい浜辺で過ごす家族との時間はとても幸せで、忘れられません。つましい暮らしの中でも、両親は子どもたちに思い出をつくらせてくれたのです」

大使「私の母は残念ながら55歳の若さで世を去りましたが、愛情を惜しみなく子どもたちに注いだ女性でした。87歳で大往生した父は、とても教育熱心でした。」

厳しく叱るのは母の役割でしたね。子どものころ、なかなか学校に行かず、ぐずぐずしていたら、

母がサンダルを手に持って追いかけてきたものです(笑)。あえて憎まれ役を買って出てくれたようで、父はそれをカバーするように優しく接してくれました」

ご夫妻は、創価大学や東京富士美術館を何度も訪問し、創価学会との交流も深い。

大使「我が国と創価学会の関係は、とても良好です。私は学会のさまざまなイベントにご招待いただき、スケジュールが許す限り参加しています。また、夫婦で創価大学の『創価教育同窓の集い』に参加させていただいたこともあります。」

池田SGI(創価学会インタナショナル)会長もドミニカ共和国を訪問されたことがあり、我が国



ドミニカ共和国の国旗にも用いられた三色——青は平和、赤は独立のために流された尊い血、白は信仰心を、表すという



エクトル・パウリーノ・ドミンゲス・ロドリゲス

(駐日ドミニカ共和国特命全権大使)

1956年生まれ。ドミニカ共和国専門学大学院卒業。その後、キューバのハバナ大学、スペインのマドリッド・コンプルテンセ大学、アンダルシア大学などに留学し、外交、国際関係などを学ぶ。ドミニカ共和国地方自治体連盟、ドミニカ共和国文学連盟、内国歳入局、通信庁での要職などを経て、2013年9月より現職。

アンドレア・アレクサンドラ・アルバレス・カミネーロ

(大使夫人)

弁護士。夫の大使赴任と共に日本に住みつつ、今もドミニカ共和国で法律事務所を運営。

エドウィン・アレクサンデル

(大使ご子息)

創価大学大学院経済学専攻・国際ビジネス専修。

の要人・有識者との交友も盛んです。創価学会や関連機関との交流は、心が通い合う温かいものです」

エドウィンさんが創価大学大学院に進んだのは、そうした縁に加え、あるきっかけからであった。

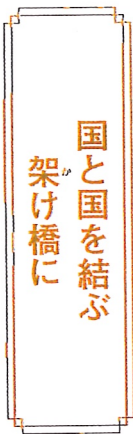
エドウィン「友人にドミニカ共和国のSGIメンバーがおり、彼が訪日して創価大学の式典に参加する際、『君も一緒に行かないか？』と誘われたのです。

その式典で、私は学生たちが発する明るいエネルギーに強い印象を受けました。それで、創価大学

の大学院に進みたいという思いがわき上がったのです。英語で学べる経済学修士のコースがあったので、その点も私にピッタリでした。

創価大学で学ぶ修士課程は、素晴らしい経験になりました。その間、自分が内面的に成長できたという実感があります。創価大学には学生を優しく包み込むような包容力があり、多様性を大切にする姿勢があります。また、創立者の思想、特に平和についての哲学が、学生一人ひとりにきちんと受け継がれていると感じました。

何より、創価大学は『人間主義』の大学です。一人ひとりがつ内面の価値を最大限に生かし、ありのままの自分の姿で、社会に貢献していく人材を育成する大学であるという点にも、私は強く共感しています」



駐日大使としての5年間を振り返って、ドミンゲス大使は言う。

大使「『ドミニカ共和国と日本の友好関係を、多様な分野において

だ大使生活ですが、その願いは叶いつつあります。たとえば、ドミニカ共和国から日本への留学生は、過去5年間で着実に増えています」

駐日大使としての公務とは別に、ドミンゲス大使は、2つの重責を終えたばかりだ。ラテンアメリカ、カリブ諸国22か国の駐日大使で構成される組織「GRULAC」の議長と、スペイン語を公用語とする中米8か国の経済統合のための機構「SICA」(中米統合機構)の議長も6月まで務めた。

アンドレア夫人も、ラテンアメリカ各国の大使夫人や外務省関係者の女性などの集い「日本・ラテンアメリカ婦人協会」の議長を、2年前に務めた。

夫人「その協会が主催して、『フェスティバル ラティノアメリカ』で『チャリティバザー』などの催しをよく行っています」

大使「私と妻は、日本とドミニカ共和国の友好に加え、ラテンアメリカ、中米諸国全体の融和のための活動も行っています。責任の重さに、身の引き締まる思いです」

ご夫妻は今、幅広く友好の輪を広げ続けるという使命の道を、手